

杉本つとむ

辞典・事典の世界

日本語講座 3

優長 ユウチャウ

ユタカニナカシ

養介 ヤカイ

ヤシナイタスル

野薄 ノハク

カルクウスレ
情ヲカキ人ヲ云ニ

怪動 カドウ

カミシツカフ

無骨 ムボウ

ホコナレトヨム其道ニ
骨ヲ抑ヌモノヲ云ニ

変化 ヘンゲ

カヘテラタム

時宜 ジギ

トキヨロシ

時代 ジダイ

トキヨ

推挙 スイキョ

ヲシアグル

辞典・事典の世界

杉本つとむ
日本語講座 3

杉本つとむ

1927年横浜に生まれる。早稲田大学文学部卒。
文学博士（東北大）。現早稲田大学文学部教授。

著書 近代日本語の成立（桜楓社）ことばの文
化史（同上）異体字とは何か（同上）方
言はどう探究されたか（同上）日本語再
発見（社会思想社）医戒（同上）蘭学事
始（同上）にっぽん語（同上）女のこと
ば誌（雄山閣）方言風土記（同上）漢字
入門（早大出版部）

住所 鎌倉市佐助 1-10-17

辞典・事典の世界

杉本つとむ日本語講座 3

昭和54年 6月15日／初版印刷

昭和54年 6月20日／初版発行

定価／1500円

著 者／杉本つとむ



発行者／及川篤二

発行社／株式会社桜楓社

東京都千代田区猿樂町2-8-13

電話／03-295-8771 振替東京6-18020

印刷所／足柄製版印刷株式会社

製本所／辰文社

© Sugimoto Tutomu, 1979／Printed in Japan

1081-790643-0723

日本の辞典・事典を考える場合、その第一歩を『倭名類聚抄』にはじめてよからう。これは承永四年（九三四）に当代の賢学、源順によって編集されたものといわれる。その序に八古人有言街談巷説猶有可採僕雖誠淺学而所注緝皆出自前經旧史倭漢之書但刊謬補闕非才分所及内慙公主（勤子内親王）之照覧外愧賢知之胡虚耳」とある。辞典編集の精神はこれだと思う。本書は順がわずか二十四歳の時に編集した傑作であるが、後に幕末、考証学の大家、狩谷棧斎が、『和（倭）名類聚抄箋註』（箋注を頭におくのは誤り）の労作を著述、その研究に心血をそそいでいる。

辞典の編集・研究の跡をたどってみると、おのずから日本文化の本質や構造を知ることができると思う。辞典は文化でありそのもつとも象徴的な存在である。辞典が語っているように、日本文化に及ぼした中国文化・中国語は圧倒的であり、決定的であって、その何よりの証拠は『倭名類聚抄』にもらわれているおびただしい漢籍である。これは『倭名類聚抄』のみでなく、本書で考察を示した辞典についてもいえることである。ことばの確かさを中国の書籍に求め、その中国の書籍を出典として明示するのが学者の仕事でもあった。辞典の編集も研究も、ある

意味ではこの出典に精力の大部分を費している。もちろんそれだけで日本の辞典が終っているわけではない。事実、江戸時代に編集された『倭訓栞』や『俚言集覧』のように、日本語のための日本語辞典も編集されている。

しかし現代の日本の辞典を考えても、流れとしてはここでふれた二つのそれがそのまま展開しているといつてよからう。そのうえ、江戸時代で新しくおこったヨーロッパ語との対訳には、これまた日本語としての訳語を、当時の唐話研究とその成果である八唐話辞典に負っているのである。翻訳とは中国語で置きかえることであつた。——このようにみていると、日本語辞典の研究には多くの問題があり、研究もまだその緒についていない。そうした意味をふくめて、日本語辞典の通史——といっても作品の羅列に終つたが——を記述してみた。私見では『倭名類聚抄』にしても、ある点では語彙も出典もただ中国古典からぬき出して、しかも中国辞典を範としてその模倣に終始したように思う。どれほどの獨創性があるうか。語彙の分類や収載の方法も、古代は古代で、近世は近世でその抛りどころは中国の辞典・字典である。

真に日本語に立脚し、日本人のための辞典の編集のためにも、こうした過去における辞典の伝統や構造——いわば日本語辞典の世界を考えてみるのが大切であろう。

一九七九年六月十日

著 者

辞典・事典の世界

目

次

一 日本 の 辞典 ・ 事典 の 歴史 1

—— 辞書史のための試論 ——

辞典・事典と時代	1	辞（字）典の発生	4
辞典の源流	5	国語辞典の編集	10
歌字と辞典編集	18	中世の四大辞典	23
キリシタンと辞典	30	近世文化と辞典	31
俗語と語彙集	34	国語辞典の完成	36
近世シナ語と唐話辞書	42	ヨーロッパ語と対訳辞典	44

二 『早大本 節用集』 の 考察 49

—— 『節用集』 研究のための序説 ——

構造と名義	49	問題点の所在	58
語彙の分類と形式	73	見出し語の性格と形式	80
見出し語の排列	87	△早大本▽と△天正本▽の比較	96
註文と語彙	107	かたかな字体	124
△早大本・天正本▽字音かなづかいの比較	131	部門別総語彙数一覧表	132

三 『増補下学集』の構成と語彙……………134

——辞典編集の方法をさぐる——

語の登録と方法……………134 各門の考察

清濁・四つがな・開合……………182 若干のノート

・門別及び五十音別による見出し語・収録語彙総数……………188

△補説▽構成と形式……………192 △義同シ▽の考察

増補部分の考察……………198 △態芸門▽の語彙

かな字体への注目……………209 201 194

・かたかな字体表／合字／連字……………221

四 永井如瓶子『邇言便蒙抄』小見……………224

——近世語研究の鍵——

刊行と書誌……………224 執筆の目的

語彙の検討……………237 義読・世話字

類語辞典の貌……………245 学者的な狂歌師

自得永井先生墓碣……………256 補記…『難字訓蒙図彙』

五 中村惕斎『訓蒙図彙』の構造……………263

——日本最初の絵入百科事典——

執筆の目的・方法

記述の形式

構成と内容

中村惕斎の略伝

・『訓蒙図彙』内容一覧 288

・辞典・事典の系譜 300

惕斎と参考資料 263
語彙の性格 275
△訓蒙△の源流 290
・『訓蒙図彙』と他の資料との比較 271

あとがき

索引

324 306

本書の口絵写真は、いずれも小著より転載したものである。念のため所蔵を次にあげておく。

『早大 本』節用集』	早稲田大学図書館蔵
『増補下学集』	右 同
『適言便蒙抄』	国立国会図書館蔵
『訓蒙図彙』	国立公文書館(内閣文庫)蔵

一 日本の辞典・事典の歴史

——辞書史のための試論——

一

辞典・事典と時代 日本の辞典・事典の歴史を記述する前に、辞典・事典とはどのようなものをいちおう考えておこう。周知のように、ふつうジテンとよぶものにはハ辞典・事典∨の二種類がある。用語のうえで両者をはっきり区別してきたのは、最近のことのようで、ハ事典∨の名称は、昭和六年（一九三一）平凡社で出版した『大百科事典』が最初といわれている。⁽¹⁾これ以前は、全書・事彙・辞典、さらに古く類書（中国の用法）などの名称をとっていて、特に名称のうえで辞典に対応するハ事典∨の呼称などは用いていない。

辞典と事典は同音語でまぎらわしいところから、俗に区別して、前者をハコトバテン∨——ことばそれ自身の解説を中心とする。後者をハコトテン∨——事柄一般の解説を中心とする。

と呼びならわしている。しかしジテン本来の使命は、単にことばの解説におわるのではなく、一つ一つのことばのもつ意味と、そのことばによって表現されている同時代の人間生活・文化現象を正しく理解することにあるから、辞典と事典は本質的には多くの点で一致し、おぎないあうものと思われる。辞典と事典とは、その本質において変わらないものであるが、ジテンの変遷を考えてみると、ある意味では、未分化な二つの形態と内容が分化発展していく過程、それが八辞典の歴史▽ということにもなる。ただ全体を通して考察してみると、八事典▽が一種の啓蒙期に多く編集・出版されていることはみのがせない。細いことは以下の記述にまかせるが、江戸時代に八事典的なもの▽がいろいろと編集され、つぎつぎに出版されていることは、その一証拠になるであろうし、ごく身近な例をとれば、敗戦後の八百科事典もの▽の流行が、やはり有力にこのことを語っているといえる。教育の一般的開放、文化・学問への関心の高まりとその平均化——こうした風潮が八百科事典▽の出版にあらわれるようである。それだけにまた、裏をかえすと、専門的な特別な文化・学問の創造という重労働の段階には、ほど遠いところで八事典▽の編集が考えられていることになる。そしてこのことはとりもなおさず、軽便主義・話の泉的便利主義の時代であることも語っている。文化の軽さや若さを示すことにはなっても、重厚で独創的な文化・学問の建設を意味することにはならない。背景にある社会や歴史が濃厚に、事典や辞典には投影しているのである。

しかも日本の辞典・事典には、特殊な事情がまつわりついている。ことば・文字を中国の漢語・漢字にあっていっているということがその一つである。厳密な意味で八国語の辞典というものが日本には存在しないといってもいいであろう。日本最初のジテンが、漢字を読むための辞典であったことも深い意味がある。いうまでもなく、むかしの人々は、漢籍や仏典を読み解くことが学問であり、それらの文献は、すべて漢字・漢文であったわけであるから、いきおい字学とならないわけにはいかなかったたのであろう。漢和辞典的なものが、ながい間、ジテンの主流となっていたこともうなづけるところである。さらに日本の辞典・事典の特色として、和歌とのタイアップが考えられる。和歌を多少とも批判的に考えてくるときとか、実作上でいかに古語（雅語）を正統に用いるかが論議されるときには、いきおい日本語への自覚と反省がおこり、国語辞典の出現をうながすことにもなるのである。これもまた日本の辞典・事典の主流にかぞえていいものである。しかし、そこには同時代の生きたことばを尊重し、愛育するという精神に欠けるところがあつた。むしろそうしたものを排除して、ただ雅びという価値概念でことばを処理してしまったくらいはあつた。

以下の記述の中でふれるつもりであるが、室町時代の末に編集出版された『日葡辞書』^{ニッポジショ}や明治初年に出版された『和英語林集成』などの外国人による日本語・外国語の対訳辞典が、むしろ同時代の生きた日本語を記載しているという皮肉をみることができる。生きた日本語を知る

上に外国人の手になる対訳辞典を第一に考えねばならないということ——外国でも同様な事情があるかどうか知らないが——は何としても、日本人の日本語観・古語（雅語）と現代語（俗語）という二つの分離した観念からの脱出が必要とされたわけである。ともかくこうした点で、多少とも八国語辞典∨というのにふさわしい辞典の出現は、江戸時代である。そしてこの江戸時代は辞典・事典の全盛時代でもあって、この時代を経過することによって本格的な国語辞典も出現したといえるのである。

辞（字）典の発生 『古語拾遺』にみえるように、日本は本来固有の文字をもたず、中国から漢字がはいってきて、はじめて日本語を書きあらわす文字をもった。しかし漢字・漢語には本来中国語を表現する機能や役わりがあったのだから、そのままでは日本語に用いることができない。たとえ植物や動物の名称でも、中国で何をさすかをよく確かめないと、八鯰∨をハアユ∨の文字（表記）に用いて、中国でナマズの意に用いていることと、くいちがうおそれがある（現代でもこの弊害は歴然と残っている）。まして抽象的な語や固有の日本語は漢字・漢語の性質・區別をよく比較検討した上でないと用いられないわけである。『古事記』の序文で大安万侶が、漢字による文章記述の苦心をみると述べているのもその故にほかならない。『古事記』の中にみられる八音・訓∨併用の方法は、その一つのあらわれで、本来意味と音とをもった漢字を意味の方をまったく無視して用いることも、その工夫のあらわれである。さらに『古事記』には、

△天之常立神訓常云登評訓立云多知△などと註文をいれる方法もとっている。この方法も漢訳仏典などにみられるというから、中国人が工夫したところであるが、この方法を漢字だけについて、必要なもの・大切なもの・誤解・誤読されやすいものを摘出して、音や訓を註記していったならば、それがとりもなおさず△辞典△の出現となるわけである。一定の分類規程をもうけて、この方法をできるだけ多くの書物とすることばに及ぼしていけば、この種の文献解説上、なくてはならない辞典にもなってくる。

二

辞典の源流 さて日本が中国の学問・文化を輸入し、多くの書物の恩恵に浴したことを辞典の歴史の面で考えると、中国の字典類の輸入がある。日本でまだ辞典らしいものが編集されない以前に、中国のものとして、次のような字典が、日本にはいつてきたと考えられる。

- (A) 漢字の偏・旁によって文字を類別したもの（字形によるもの）。『説文解字』（漢・許慎）・『玉篇』（梁・顧野王）
- (B) 漢字の意義によって文字を類別したもの（意義によるもの）。『爾雅』（後漢・劉熙）・『釈名』（同左）・『小爾雅』（後漢・孔鮒?）・『広雅』（魏・張揖）
- (C) 漢字の音によって文字を類別したもの（韻によるもの）。『切韻』（隋・陸法言）

中国の書物を学習することが学問であつてみれば、まずハ学問はことばよりいるVというわけ、その第一歩で漢字の解釈に専念するのは当然のことであろう。そこで中国の字典が輸入され、学習に用いられたのもきわめてあたりまえのことである。現代、英文学や仏文学を学習するのに、外国出版の辞典をとりよせて用いるのと、まったく同じ理由といえる。上にあげた字典類が、まず第一に手にとられ、それで日本人が漢籍を学習したわけである。自分でつくるより、はるかに容易であり、構成・内容ともによくできていたと思われる。

上であげた『玉篇』は、日本では『倭(和)玉篇』(室町時代)の呼称で借用踏襲され、『爾雅』は貝原益軒の『和爾雅』や新井白石の『東雅』(日東の爾雅)につながり、『釈名』も貝原益軒の『日本釈名』などに踏襲されている。いかに、中国渡りの字典類が日本に長く強い影響を与えたことか、驚かされることであろう。

このように、中国渡りの字典はそのまま日本人に用いられたし、日本人向きに手を加えれば、日本人が学習する範囲内での漢籍解説上の字典も考えだすことはできるわけである。たとえハ漢漢字典Vでも、日本的なそれが製作されるのである。日本最初の字典(厳密には日本語のではなく日本人の字典)が、このような過程で誕生した。すなわち次のものである。

弘法大師(空海)・篆隸万象名義 テンレイバンシヨウメイギ 三〇卷 (天長七年(八三〇)以後の成立。現存本、永久二年(一一二四)書写)

これは多少独自の考えもあると思われるが、上であげた中国字典『玉篇』を抄録したものと

いわれ、『玉篇』にいろいろと註記してある古本からの註解の部分をけずりとり、漢字音とか字解などはそのままになっている。書名の『篆隸』は各漢字ごとに篆書と隸書（楷書）の二字体を出しているところからである。収録字数は約一、〇〇〇字、五四一の部首にしたがって漢字を排列する。たとえば八條 旅条反官也／伴 蒲旦反侶也（篆隸の区別はとる）のようになえる。初期の字書として、当然の方法・態度をとっているわけで、これは最古ではあっても、はたして最初のものかどうかはいちおう問題にされるところである。しかし、字典出現の過程から推定して、やはり初源のものに近いことは確かだと思う。この種のがほかにもあったと仮定するほうが妥当するかもしれない。『日本書紀』の天武天皇十一年に、境部連石積らに命じて八新字一部四十四卷ををつくらせたという記事がみえるのも、やはり漢字に関するものであろうが、実物がないので断定はしかねる。『篆隸万象名義』のあとをうけて、滋野貞主（七八五～八五二）が淳和天皇の勅を奉じて撰じたというものに類書『秘府略』（千巻）がある。これは貞主が当時の学者の協力をえて、漢籍の成句・名句を事項別に収集分類したもので、いわゆる字典とは異なり、百科事典的知識が註記されている。そして漢詩文を作るうえにまたとなく重宝な文章作文用語辞典でもある。本書は二巻のみしか現存していないから、内容をくわしく検討することはできない。しかし、日本人がどのようにに漢語・漢籍を自分のものとして役だたせ、活用したか、読書傾向までも知ることができるであろう。『篆隸万象名義』の類を八静

またはハ体∨の字典と考えると、本書のようなものはハ動∨、またハ用∨の辞典と規定することができようか。基本篇に対して、応用篇とも考えられるものである。やはり当時の学問の性格がここに投影しているといえる。

日本人にとって漢字がすべてでないことは当然のことであるが、中でも、漢字に対応する日本語（和訓）を考え、それを註記する方法が工夫される。ことに漢訳仏典中の漢語語彙をぬき出し、それに註を付すハ音義∨の方法が考えられた。現代でも古典を読むような場合、学習作業として文中の難語などをぬき出して、それに音（読み）と義（わけ・訓）を付すことがあるが、それと同じような方法である。仏典のみとは限らないが、仏典の方には唐の玄奘（ゲンゾウ）『一切経音義』（もと『大唐衆経音義』）や、慧琳の『一切経音義』、慧苑（エオン）の『新訳華嚴経音義』、晋の可洪の『新集蔵経音義随函録』などがあつた。いずれも中国で開拓された方法であるが、日本でもこれを取り入れ、やがて辞典を成りたせし母胎となつたことは忘れてならない。たとえば、『新訳華嚴経音義』に万葉仮名で和訓を与えた『新訳華嚴経音義私記』（上・下二巻、奈良朝末写本）がある。単字・熟字のほか、則天文字などもあつて漢字字体にも注意をはらっている。ただその編集という点で辞典の体裁をとらず、本文のままに註記を示しているにすぎない。しかしこうしたハ音義∨の内容には後の『類聚名義抄』や、さらに『倭玉篇』にみられる方法と内容があるわけで、日本の辞典の原点を求めらうと、ハ音義∨は重要な方法の一つである。